

平成22年 8月28日 (土)

国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
株式会社 イビソク

1 はじめに

一般国道253号上越三和道路は、上越市寺と同市三和区を結ぶ延長7.4kmの地域高規格道路で、上越市から南魚沼市に至る延長約60kmの上越魚沼地域振興快速道路の一部です。

下割遺跡は高田平野中央部に位置する米岡集落の北～西方に広がる遺跡で、道路建設に伴い、平成14年度から断続的に4回の発掘調査を実施しています。今年度の調査区は、遺跡の東端に当たり、上越市米岡字番場780ほかに所在します。関川の支流である飯田川左岸の標高14.5m前後の自然堤防上に立地し、平面積2,550㎡を対象に4月から調査を実施してきました。現況は荒蕪地となっていますが、近年まで宅地として利用されていました。

2 土塁と濠

当地は、土塁や濠によりほぼ方形（南北約70m、東西約60m）に囲まれ、また東側には鍵の手状の出入口も設けてあり、中世の館のような景観を呈していました。このような土塁や濠で囲まれた屋敷地は、上越地域の関川右岸から東頸城丘陵麓にかけて多く認められ、「環濠屋敷」と呼称されています。集落の核として機能し、その成立時期は中世後期から近世と考えられています。今回の屋敷地の土塁と濠は、北側と西側が良好に残っており、土塁頂部と濠底面の比高差は1.7～2.0m程ありました。断ち割り調査及び明治の更正図との照合の結果、この遺跡の土塁と濠の構築時期は、残念ながら明治以降であることが分かりました。



調査前の調査区近景（北東から）

3 見つかった遺構と遺物

過去の調査事例から、古代や中世の遺構・遺物が多く検出されるものと期待されていました。しかし、地形的に高所に位置するためか、その後の時代に何度も繰り返し利用され、古い遺構の一部は壊れていることも分かりました。見つかった遺構には、掘立柱建物の柱穴・井戸・土坑・溝などがありますが、その大半は近世（江戸時代）以降に構築されたものと考えられます。遺構出土の遺物は非常に少なく、構築時期を判別しがたい状況でした。遺物は近世陶磁器・瓦器が最も多く、中世の珠洲焼・中世土師器・青磁、古代の須恵器・土師器が少量出土しています。



北側の土塁と濠の完掘状況（北西から）

4 中世（室町時代）の道路

調査区を東西に、直線的に横断するようにつかりました。側溝を含めた全体の幅が、8.0～8.5mと大規模なもので、今回は北側の溝（SD500）を「側溝1」、南側の溝（SD695）を「側溝2」と仮称します。側溝1は幅2.6～3.2m、深さ80～90cm、側溝2は幅1.5～1.9m、深さ50～60cmであり、側溝1が大きく造られています。底面は緩やかに湾曲していますがほぼ平坦で、堆積している土に目立った砂礫は含まれていません。側溝1には北側から埋まったような、または掘り返したような痕跡も認められます。路面は幅3.7～4.3mで、後世の地形改変が多かったためか、盛土や硬化したような部分を確認することはできませんでした。溝から出土した遺物は非常に少なく、中～下層にかけて散在していました。珠洲焼が主体で、中世土師器が少量あります。

5 まとめ

今回見つかった道路は、出土した遺物から、中世（室町時代）に利用されていたと考えられます。当該期の道としては大規模なものであり、米岡集落の北西に位置する上真砂集落から伸びる道とつながる可能性も高く、慶長二（1597）年に作成された「越後国頸城郡絵図」に描かれた道（松之山街道）に該当する可能性があります。



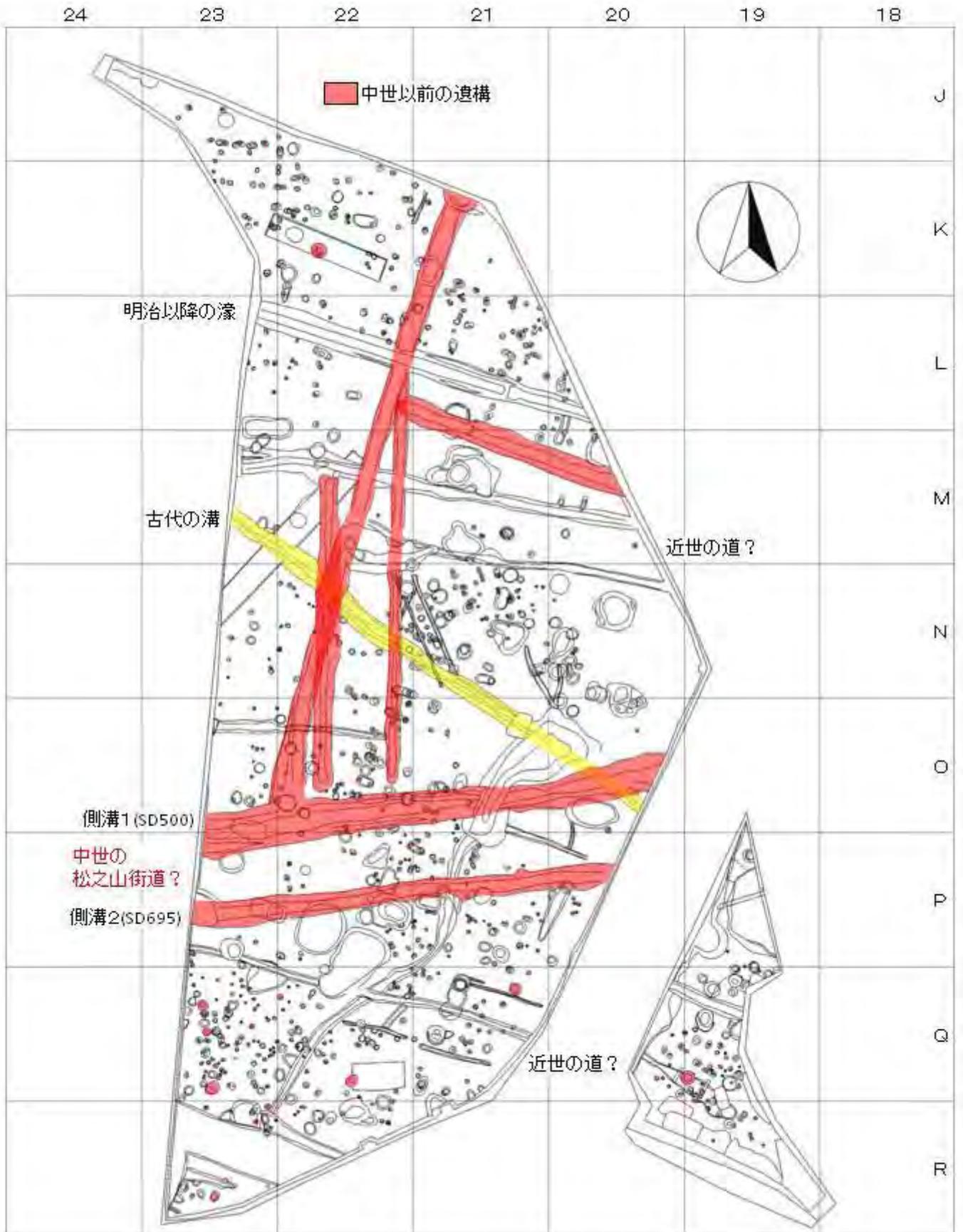
中世の道路（西から）



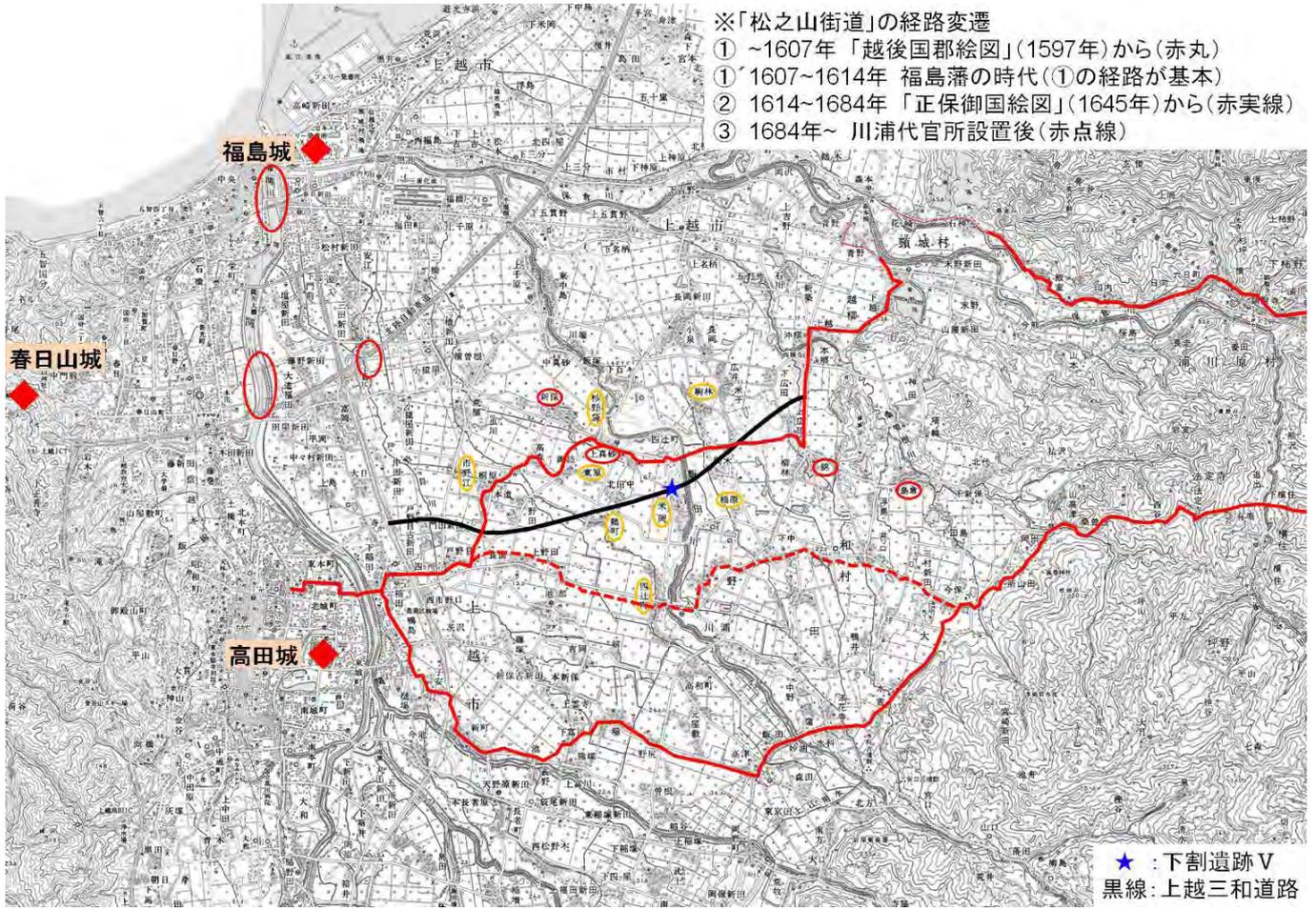
側溝1 (SD500)の堆積状況（東から）



下割遺跡Ⅴから上真砂集落方向を臨む（南東から）



下割遺跡Ⅴ 遺構全体図(1:400)



松之山街道の経路の変遷 (黄色丸は下図に見られる集落)



越後国頸城郡絵図